

自閉症児の保育と指導法

佐々木 矩子

はじめに

今年の春に、私は地元の幼稚園で一ヶ月間教育実習をしてきました。その幼稚園で、ある子どもに出会いました。その子は、一見まわりの子どもたちと変わらないようでしたが、私とその子のクラスの保育に入った途端、その子は周りの子がしないような行動をし始めたことに気づきました。朝幼稚園に母親と右手で手をつないで登園し、母親が帰ると、つないでいた右手の親指を口にくわえます。隣に母親がいないとき、つまり幼稚園にいる間中、おしゃぶりのように親指をくわえているので、その子の親指は野球のグローブのように赤く腫れ上がっていました。そして登園し、自分のクラスに入ると、絵をかきます。一枚目の紙には、太陽と園庭に咲いている草花。二枚目の紙には、蛙と紫陽花らしき花。三枚目には、信号と人。四枚目には、馬と羊とウサギ。五枚目には、……と永遠、二、三十枚毎朝、決まった順序で書いていきます。幼稚園児とは思えないほど、素晴らしく上手な絵だったのを覚えています。とにかく衝撃でした。日々、その子のいろいろなことを知れば知るほど、その子を知りたいと思う気持ちが強くなりました。その子は、「自閉症」という病気でした。このテーマを選んだきっかけは、「自閉症」と呼ばれる障害をもっと詳しく勉強したかったからです。自閉症とはどんな病気、自閉症の子どもたちにはどのような指導をしていったらよいのか、そして今後どうあるべきなのかを調べていこうと思います。

第1章 自閉症を正しく理解する

第1項 自閉症とは何か

1 自閉症を正しく理解する

自閉症は医学的には発達障害の1つの型で、これによる社会生活への影響は、終わりがなく続くとされています。では、どうしたら自閉症といわれる子どもがよい状態で、できるだけ普通の社会生活を送ることができるように成長・発達させることができるのでしょうか。これに対する1つの考えとして、私が教育実習で得た経験と記録をもとに考えていきたいと思います。

自閉症という名称は、今から半世紀も前にカナーというアメリカの小児精神科のドクターが、今までに知恵遅れとされてきた子どもの中に人との情緒的接触の障害を特徴とす

るものが存在するとして、11人の子どもを学術誌に報告したのがはじまりです。その後、この障害をもった子どもの数がとても多く、同一年齢の子どもの0.15%にもなることと、障害の度合いも重度で成人の年齢になっての社会自立が困難であることから、医学や教育の重要なテーマになってきました。

しかし、ここ最近になって、自閉症に関する学問的な考え方が大きく変わってきました。また、それに沿って教育界の考え方も変わってきています。このことは、自閉症を正しく知るために大切です。それは、最新の自閉症に関する情報が必ずしも十分ではないために、一部には間違った理解のもとに、してはならない対応が行われていたりするからです。以前は、自閉症児は自閉という心理的原因をなくすようにすれば自閉症は良くなり、言葉も話すようになるし、学校でも勉強するようになる、などと考えられていました。

しかし1970年代になると、自閉症というのは、見る、聴く、触る、嗅ぐ、といった知覚を理解することの障害、あるいは周囲のできごとを見たり、聞いたりして、このできごとの意味を知る機能であると認知といわれる心の動きの障害によって、精神機能の発達に遅れやかたよりが起こった、という考えが主流になってきたのです。

2 自閉症は情報の理解の障害

自閉症の子どもは文字とか、マーク、道路標識などに興味を持ち、よく覚えます。つまり、形の理解はあるようです。しかし、それが何なのかわかりません。つまり、意味の理解ができないのです。聞いた言葉の理解も困難で、ものごとの流れや筋道の理解に障害があります。自閉症に見られるこうした機能の障害は、認知障害と呼ばれています。ものごとの全体を見て理解するのではなく、耳にしたり目にしたりしたことの一部に反応するために、特定のことにこだわったり、怒りを爆発させます。また、せっかくなかろうように提示されている手がかりが利用できないために、正しく対処することに失敗したりします。しかし、事態の意味はわからなくてもその場の雰囲気を感じ取って、用心したり、それに反応したりします。例えば、自閉症の子どもが病院に行って注射をされたりすると、その病院に行くのをいやがり、泣きわめいたりします。でも、注射したりせず、何もこわいことをされないと、次に病院にきたときにはもう泣くことはありません。むしろ、道順をすぐ覚えて、駅を降りるとお母さんの手をひっぱるようにして病院にやってくるのです。

自閉症の子どもはこのように、認知だけではなく、知覚のプロセスに障害があるらしいのです。自閉症というものごとはすべて正しく理解しているが、極端に用心深く、自分の心を閉ざしているという、アウトプットの障害が考えられがちですが、逆に知覚とか認知といった、入ってくる情報の処理に故障があるという、インプットの障害なのです。なので、自閉症の教育や治療というのは、正しい社会的な反応が出るように、どうしたらその子に正しい情報が入るかを検討し、工夫することなのです。

第2項 自閉症の研究はどこまですすんだのか（略）

第3項 自閉症の症状はどうして起こるのか

1 「自閉」だから話せないのではない

こうしたことがずいぶんわかってきているにもかかわらず、社会的にはまだまだ自閉症は「自分の殻に閉じこもった子ども」、「心を閉ざす病氣」だとおもわれているようです。心を開けば普通の子どもになる、だから普通学級での正常な子どもとの触れ合いが大切だ。ということで、将来に向けて、いろいろなことを学ばねばならない小学校の六年間を、日常生活で大切なことを何も教わらないままごし、中学生の年齢になってしまったという子どもが後を絶たないのが現実です。たしかに、いまから三十年前にはそうした考えが主流でした。「受容」ということがさかんに言われていました。安心して他人と交流できるよう、彼らの要求は何でも聞き入れる態度が大切であるという考えでした。

自閉症を心理的原因によるとする考えをくつがえしたのは、イギリスのラターという人です。いくつもの事実をあげて、心理的原因説では説明できないとしました。さらに、自閉症は脳障害をもっているとするのが納得できることから、どうも自閉症は脳障害によって起こった発達障害のひとつの型であろうとしたのです。この考えは世界中の多くの学者や臨床家の賛同を得ました。ここで大切なのは、脳障害によって自閉症という心理的メカニズムが起これと考えるのではなく、自閉という心理的メカニズムそのものの存在が否定されたということです。もし、自閉という言葉を使うならば、それは症状のひとつであるに過ぎないということになります。

では、どのようにして自閉症の症状が起こるのでしょうか。ラターは言語と認知の障害という考えを示しました。これはふつう、言語障害と言われていますが、言葉が話せないから自閉症になるということではないのです。言語障害があって、相手の言う言葉の意味がわからない、したがって言葉でものごとを考えることができない、ものを見て理解することに障害がある。そして、そのことによって起こる特異な行動が自閉症の症状なのだとする考えです。ラターの考えは、同じイギリスのハームリンとオコーナーによる自閉症児のとかくや情報処理にかんするさまざまな心理学実験の結果を踏まえてのものでした。

2 音や光に敏感

最近、子どものときに自分は自閉症だったという人が書いた手記がいくつか翻訳されています。ドナ・ウィリヤムスの『自閉症だったわたしへ』（河野万里子訳、新潮文庫）もひどく敏感だったことが記されています。自閉症の多くの人には、テレビの特定のコマーシャルをいやがるなどといった知覚過敏があるそうです。（表②）。

しかし、彼らの知覚過敏は敏感にそれ避けるだけではなく、たとえば、サイレンの音を聞いて、それが消防車のサイレンなのか、救急車なのか、パトカーなのかもわかりますし、

耳の横で紙切れをふって、その音に聞き入ったり、手かざしをして、指の間からの光の変化に見入ったりします。いきおいよくトランポリンではねて、運動感覚に夢中になったりもします。また、自閉症の子どもは抱かれるのを好み、知らない人にも抱かれようとします。私の実習で出会った子どももそうでした。これは、愛情とかコミュニケーションを求める行動とか、抱かれる際の触覚刺激に浸る行動と考えられています。

表② 自閉症にみられる知覚の障害

①知覚過敏
・ 特定の感化気宇を意避
・ 感覚による選別と 別
・ 特定の感覚に没入
②形の認知が意味の認知に優先
・ 意味の操作の困難を暗記力で代用
・ おもちゃ遊びの困難
③パターン認知
・ 単純な配列、憶えた順序に固執
④文脈理解の障害
・ ヒントの活用の困難

3 情報を入りやすい形にしてあげる

自閉症の子どもで、最初に気づくのは、言葉の遅れです。普通なら、一歳半ごろになれば二つか三つの言葉が出てきて、二歳になれば、ひと通りのことが言えるようになるはずなのに、二歳になっても言葉が出ない。あるいは、二言、三言、言葉が出たのに、その後何も言わない、といった場合が多くあるそうです。呼んでもふり向かない、おもちゃも並べるだけで、それらしい遊びをしない、親とのやりとりができないで、一人で物を並べたり、木の葉の揺れるのをじっと眺めている、などといったことが目立つといわれます。

こうした特徴的な行動から自閉症の診断がされるのですが、それはその子どもが自閉という心理的メカニズムをもっているからではありません。あくまでも、自閉的という印象をもつということです。実際に子どもたちと接しているお母さんたちや幼稚園、保育園の先生には子どものほうからなついてきますし、そうすれば自閉的という印象は薄らぎます。しかし、こうして自閉的にみえなくなったり、ごく狭い範囲の人と安心して交流できるようになったということと、自閉症の子どもが言葉を覚えたり、集団行動に参加したりすることとは無関係なのです。自閉症の治療とは、言語のスキル（技能）や秀がん行動のスキル（技能）を身につけていくことであって、自閉性をなくすことではないのです。自閉症といわれる子どもが、これから先の日常生活や社会生活をスムーズに送れるように

すること、それが自閉症の治療の目的なのです。それらのスキルは、普通に子どもたちなら、わざわざ教えなくても、ひとりで覚えてしまうものなのです。ところが、自閉症の子どもにはそれができない。教えようとしてもそれが入っていかない、見ようとも、聞こうともしないときがあります。無理に教えようすると嫌がってしまいます。のように、自閉症には情報の入りにくさがあります。そこで、その情報に手を加え、入りやすい形にして入れていく、これが自閉症保育・教育の基本となるのです。

第4項 自閉症にはどんなタイプがあるのか（略）

第2章 指導の基本

第1項 家庭指導を重視する

1 母親を立派な指導者にする

家庭指導を学校の指導以上に重視することが自閉症児を成長させることに不可欠です。しかし、実際にはあまり手をつけられていないのが現状のようです。教師に家庭に働きかけるだけの指導力がない、自信がないというのがあっているのかもしれない。

自閉症児は障害が障害だけに、家庭に任せても、自主的に時間を使い生活することはできません。任せても、親も、どう指導したらよいかわかりませんから、放ったらかしにしたり、四六時中監視したり、いろいろ連れ回ったりすることが多いようです。実は家庭で十分指導されていないこうした子どもが、体だけ大きくなって、問題をかかえて苦慮しているのが、今の年長自閉症児の現状ではないでしょうか。家庭指導のつけがまわってきていると考えられています。もちろんこれは家庭だけに責任があるというのではなく、指導を怠った教師にこそ責任があるのです。

この教育は昔から子どもに対し3分、親に対して7分の教育的働きかけが必要であるといわれています。子どもに働きかけをする以上に親に働きかけをし、親を立派な指導者にしなければならないことです。

自閉症児の成功例を見ますと、教師だけの指導で社会的自立を果たしたという事例はほとんどありません。母親だけでがんばって成長させたいという事例はいくつかあります。しかし、これは誰もが、真似できない、並々ならぬ母親の努力が実を結んだ例がほとんどです。

自閉症児の治療も教育も十分ではなかった昭和40年代に小学校2年で登校を拒否させながらも、歯を食いしばって、学校教育をほとんど自分で完全にこなせるようにつけ立派に自立させたという母親もいます。この方は、第2回十亀小特別賞を受賞されて方ですが、並々ならぬ苦勞があったと知りました。「今までではこの子の将来を案じていましたが、今では、この子が、私の老後を見てくれるのではないかと期待しています」と話されたそ

うですが、なかなか誰もがができるものではありません。子どもの幸せを願う強い気持ちが支えとなり指導力を発揮できたのでしょう。

こうした母親だけによる成功事例は他にもあるかもしれませんが、やはり教師と親が一体となった指導にかなうものはないと考えました。

2 共同指導者にならなければならない

教師と親がお互いに一生懸命指導するだけではいけません。お互いが通じ合わなければ意味がありません。対等の立場で指導する共同指導者になることが必要です。

共同指導者ですから、親を指導するだけではなく、親から学ぶことも忘れてはなりません。親は子どもが生まれて以来、子どもを育て、あらゆることを熟知しているので、教師が積極的に親から吸収することも必要になってきています。実際、母親が立派な指導法を身につけていることもしばしば必要になってきます。

ある話を紹介したいと思います。ある先生が朝の運動で、鉄棒を恐れて、やろうとしないう自閉症児につきっきりで指導していました。鉄棒に上がって前回りをするだけの、鉄棒の運動では初期の指導内容なのですが、鉄棒を握ろうとしません。やっと握ったので今度は、飛び上がらせようと指導を試みていました。しかし、先生が補助をしようと近づくとさっと逃げてしまうのです。先生は子どもを励まし、実に根気よく指導をし、やっと鉄棒の上に上られるようにしました。指導を初めて1ヶ月目のことです。しかし前回りとなるとまた大変です。補助しようするとまたさっと逃げてしまうのです。先生は連絡帳を通して鉄棒の様子を母親に報告しました。ところが、次の日、母親からの連絡帳を見ると、「鉄棒、家でできるようにしておきました。やらせてみてください」と書いてあるのです。母親は子どもをどう扱えばよいか、どう対処すればよいか、きちんとその方法を身につけているのです。決して先生の指導法が悪いというわけではありません。長い試行錯誤を繰り返しながら、子どもと格闘してきた親です。この文をよんだとき、教師が学ばなければいけないことがたくさんあると確信しました。

とにかく、共同指導者として成功するかどうかは、家庭と学校がどれだけ意思疎通を取り合うかによって決まるのではないのでしょうか。お互いが一つの目標に向かって努力するなら、子どもは間違いなく成長すると思います。

教師と親が意思疎通を図るための手段として、まず連絡帳は欠かせません。自閉症児に実際に使った連絡帳(表④)を参考に載せておきます。この連絡帳の特徴は、子どもが家庭でやらなければならない課題を指導順に記載していることです。子どもが適当にやり評価をするのではなく、親ができるように指導するのが目標ですので、当然すべてに○印が入るということになるそうです。親にとっては、厳しい連絡帳ですが、指導目標がはっきりしているので、具体的な指導法についての意見交換ができ、大変効果的だそうです。

表④ 自閉症児に実際に使った連絡帳(略)

第2項 社会的自立という目標を持つ

1 将来を見通した指導を行う

2つ目は、どんなに重度で、大変な子どもであっても、「社会的自立をもつ」という目標を、子どもの幸せを第一に考えるなら決して放棄してはならないということです。現に生きているのを子どもたちであり、生活の主体がこの子どもたちにあることを考えれば、親や教師が「この子はだめだ。将来は施設へ入れよう」などと考えるもはもってのほかです。先に自閉症児をとして見るのではなく、一人の人間として見なければいけません。人間として見るならば、働くこと、自立することは人間の当然の基本的欲求で、その欲求を実現するためには、援助を続けることが親であり、教師に課せられた課題ではないかといわれています。

では、具体的にどうすればいいのでしょうか。まず大事なことは、小学校入学まえの幼稚園・保育所から、目先の保育に振り回されたり、心情論で方針を決めたりするのではなく、将来の自立を考えた指導・保育、すなわち実社会に役立つ力を根気よく身につけるようにしなければならないということです。「子どもがこんなに小さいのにとても将来の自立など考えられない」などと言う人も多いようですが、将来生きていく上で必要な身の回りのことが、正しく確かにできるようにすることから始めればよいということです。自閉症児は教えなければ、指導しなければ、技術や態度はなかなか身につかないという障害もっています。

いずれにせよ、自閉症児の場合は小さいときからどれだけ将来の自立を考えて、保育・指導をしてきたかが、子どもたちの将来を決めるといっても過言ではないことを知りました。

2 働く活動を重視する

自閉症児が一番生き生きしているのはどういうときでしょうか。「トランポリンをしているとき」、「びよんびよん飛び跳ねているとき」だと思われがちです。実際、私も実習に行ったときにもこう思いました。しかし、これは常同行動、自己刺激行動なのでむしろ止めさせなくてははいけません。

専門家によると、自閉症児が一番生き生きしているのは、遊んでいるときでもなく、学習しているときでもなく、もちろん勝手な行動をしているときでもないそうです。ゲームや遊びをしても、無関心だったり、一人で勝手な行動をすることが多いですが、作業をしているときは目的がはっきりしているため、知覚、認知できやすく、理解できやすいのです。結果が目で見えてわかるため見通しがもちやすいからです。作業にもいろいろありますが、手工業的作業より、身体全体を使った作業のほうがより安定し、作業意欲も違ってきます。これは手工業的な作業より身体全体を使った作業のほうが、やはりより見通しが持

ちやすいからです。

農園で草引きをさせても、座り込んで、性器いじりをし、作業をしない自閉症児に、みんなが引いた草をじょれんに入れ堆肥小屋などで運ぶ作業をさせました。単純な繰り返しの作業なので、数回一緒にやると、すぐに理解でき、一人で運ぶことができるようになりました。ところが一旦作業を覚えると、決して楽な作業ではないのですが、まったく休もうとしないのです。汗をいっぱいかいて一生懸命やり、表情もにこにこしているのです。普通なら楽な仕事をしようとするものですが、自閉症児はしんどい、しんどくない、といったことは関係ないようです。この子どもたちのやる気は、理解できる、できない、見通しがつく、つかないによって左右させるということです。このことは指導する上でたいへん重要なことだと思います。「自閉症児は何をやらせても意欲がない」とよく言われがちですが、決して意欲がないわけではありません。理解できる、見通しが立つ課題が与えられてないからなのです。先の子どもが、草引き作業をやらなかったのは見通しの立ちにくい課題だったということです。

できることを直接的にねらうよりも、どのようにして分からせるようにするか、見通しを持たせるようにするか、課題の設定や指導の工夫が大切であるということです。

第3項 社会的スキルを身につける（略）

第3章 指導の実際

第1項 一斉指導と個別指導でねらうもの（略）

第2項 子どもへの接近 ～ほめたか・叱りかた

子どもに近づくためには、まずその子を知ることです。「子どもを知る」といっても漠然として、なかなかつかみにくいものです。そこで、「子どもを観察する」ことから始めて見ます。観察するにあたって、いろいろの観点から子どもを見ると、どのような子どもなのか少しずつ分かってきます。

ここでは、言葉の獲得に遅れのある自閉症児の例で進めていきます。

◆子どもの興味・関心、あるいは好みを知る

子どもはどんなものに興味や関心を示すのか日常の生活のなかで調べておきます。（好きなおもちゃ・場所・食べ物・人物など）

◆行動の観察

どのような点に困難があるのかを観察します。このときもただできない、遅れがあるという見かたをせずに、できているところ、困難を示しているところなどを細かく見ていきます。たとえば、ことばを中心に見ていくのであれば、日常生活のなかでのことばの理解の程度、生活のなかで使っていつことば、ことばのやりとりの程度などを細かく観察していきます。ことばがなくても、その子なりに、身ぶりや表情で要求をだしていることがあります。このような一連の行動を周囲の状況と合わせて観察していきます。また、そのほ

かの運動能力、日常の生活習慣、社会性などの発達の状況もおさえておくようにします。

◆接近の仕方

日常生活のなかにおける子どもたちの行動を観察した上で、接近していきます。子どもの観察から興味や関心のあるものをきっかけとして自然に近づいていきます。まず、子どもの遊びに合わせて教師も一緒に過ごします。このとき、急に手をひっぱったり、大きな声をかけたりしないでゆったり静かにし、安心感を持たせるようにしましょう。最初は教師から離れてしまうかもしれません。しかし、何回か同じ遊びをしていると、子どものほうから近づいてくるか、そうでなくてもその人を認めるようになってきます。自閉症児は、警戒心がとても強いのです。

このような信頼関係ができれば少しずつこちらの要求も出していくようにします。子どもはこちらの要求にすぐに応じないかもしれませんが、この場合は、子どもの反応が見られるまでゆっくり待つようにします。「どうして返事しないの」「早くしなさい」などといってせかさないうように心がける必要があります。

◆ほめかた

子どもとの関係が成立したら、つぎは、遊びのなかなどでこちらの意図したより好ましい行動が見られたときはひめるようにしておきます。では、どのようにほめるのがよいのでしょうか。たいていの場合は「おりこうね」「えらいね」「じょうずね」などということば、あるいは驚きのジェスチャーなどで表現します。どのようなほめかたであれ、ほとんどの子どもは自分の何についてほめられているのか理解することができます。

しかし、自閉症児の場合、ほめられたことが理解できているかどうかを確かめる必要があります。もしほめられていることがわからないようであれば、分かるようにほめる必要があります。つまり、ことばでのほめかたではなくて、もっと具体的にその行動が起こったとき、すぐに子どもが快と感じるようにほめるということです。子どもが快と感ずるものでなければ効果はでませんし、逆に子どもの嫌がるものであればますますこの行動は避けられます。快のものであっても、あまり多くしすぎても効果は薄くなってくるので、子どもの様子を見ながら変化させていくことが大切です。

つまり、障害が重ければ重い子どもほど、すぐその場で子どもにわかるようにほめるということです。より好ましい行動が見られるようになってきたら、ほめる回数も徐々に減らしてその行動が定着していくように気長につきあうようにします。

◆叱りかた

叱ることは、ほめることに比べてあまり効果がないといわれ、「叱るよりほめる」とよくいわれているそうです。しかし、自閉症児の場合、命や安全に関すること、してはいけないことを教えていくとき、話してわからないときは叱ることも大切となってきます。実習で私は、子どもがしてはいけないこと、危険なことをした場合の叱りかたが非常に難

しく、よく担当の先生に指導していただきました。昔は、よく叱られて土蔵のなかに入れたと言う話を聞きましたが、これは罰として子どものいやがる暗い場所を選んだわけです。たとえば、してはいけないことをしたとき、子どもを暗室に入れてしばらくしたら外へだすといったことです。この方法を用いるときも、子どもの嫌うものでなければ効果がありません。また、ここでもなぜ叱られているかわかるようにしかることが大切です。

そして、ほめるにしても叱るにしても、その基準が一定でなければなりません。子どもにとって困るのは、教師や親が自分の気分ではめたり叱ったりされることです。機能はほめられた行動でも、今日はいけない行動として叱られたのでは、こどもは迷ってしまいます。

第3項 安全への指導（略）

第4項 排泄の自立にむけて

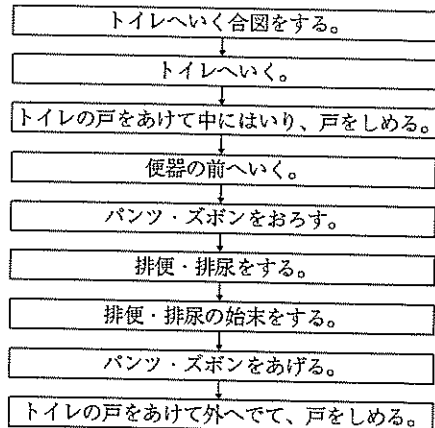
排泄が自立するようになる時期について、個々の子どもの個人差はあるにしても、排泄にしてはだいたい3歳ころからできはじめ、4歳半ごろには自立できるようになることがわかっています。

自閉症児の場合、5歳を過ぎてもまだ自立のできない場合があります。このような子どもの指導についていくつかの段階に分けて考えていきたいと思います。

◆排泄行動ができかかっている子

十分に排泄行動が定着していない場合、まず何につまずきがあるのかを観察してみます。注意深く観察するにはいくつかの視点によって見るとよいです。一つの例として排泄行動を図②のように分けてみます。図②を参考にして子どもを観察してみますと、どこにつまずきがあるかが発見されます。たとえば予告がうまくできなかいのか、トイレの場所へいくのが嫌なのかズボンやパンツの上げ下げがうまくいかないのか、後始末ができないのかは見つけだせるでしょう。このようなうまくできない行動をとりあげて、できないところを練習させましょう。つまり、排泄に必要なスキル（技能）を教え、それを練習させるようにします。「ときどき失禁をしてしまう子」の場合も同様に、できたときにはことばなどでわかりやすくほめるようにし、その行動が定着するように繰り返し行います。

図② 排泄・手洗い行動における下位行動項目



◆排泄行動が自立していない子

排泄行動は、生理的な要因と環境的な要因が考えられます。生理的な要因が疑われる場合には、医学的な検査を受けるようにします。生理的な問題が疑われない場合は、先に調査した失禁の実態を参考にしてどのような指導をすればよいのかを考えていきます。子どもの現時点での問題は何か、今できることは何かを観察し、できることから始めて、自立の方向へもっていくようにします。

おむつをしている子どもの例を考えてみましょう。おむつをしたままで放られてはいけません。まずおむつをとって、便器に座らせ、排尿・排便をすることを教えます。最初は手をとって、カイジョシマス。トイレに行くのをこわがるようであれば、まず、おまるを使って指導します。おまるを使ってできるようになったら、徐々におまるをトイレに近づけていき、最終的に一人でできるようにします。

このようにしてトイレにいて一人で用をたせるようになるのを目標にするのですが、まずトイレにいきたくになったら相手に知らせることが大切です。「チー」や「おしっこ」といって知らせる方法や、ことばのない子どもにはサイン（下腹部をたたくなど）や絵カード・文字カードなどの使用による方法も考えておく必要があります。自閉症の子どものトイレの自立は、比較的早くできるようになったと聞くようです。

第5項 衣服の着脱の自立に向けて

衣服の着脱ができるようになる時期は、大体11ヶ月「洋服のスナップを自分ではずす」、30ヶ月「衣服の着脱を一人でしたがる」、36ヶ月「自分でパンツを取って用をたす」、「ひもの結び目をほどいて、着物をぬぐ」といわれています。個々の子どもの個人差はあるとして、遅くとも約3歳から3歳半にかけて衣服の着脱が可能になります。

しかし、自閉症児の場合、就学段階にきてもあるいはそれ以上の年齢になっても着脱がうまくできないことがあります。そこで指導のあたっては、着脱が可能となる発達水準（3歳～3歳半）まで時期を待つというだけでなく、今できることから少しでも自立の方向にもっていくように子どもに積極的に働きかけていくようにします。

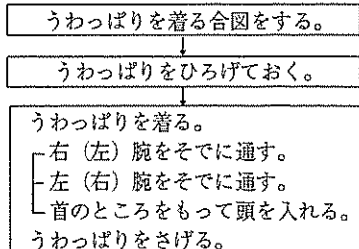
◆わずかの援助で着脱ができる子どもの指導

〔方法〕

・どのような点で援助を必要としているのかを把握し、できないところは繰り返し練習させるようにする。

たとえば、上着を着れるようにするための指導として、この順序（図③）にしたがって子どもを観察し、できないところをチェックします。

図③ 上着の着脱における下位行動項目



援助を必要とするところ	指導例
・上着の前後がわからない。	→着る前に上着の後ろを前面におくようにする。
・腕をうまく通せない。	→右腕がうまく通せないときは、左手を使って補うようにすることを手をとって何回もやらせるようにする。
・頭を入れることができない。	→子どもは頭から服をかぶせられることを嫌がります。そこで、最初にかぶせてあげて後は自分でひっぱるようになるなど工夫します。
・上着をさげて身づくろいをする	→子どもが自分で着脱をできるようになっても身づくろいができるようになるのは、もっと遅れます。はじめは上着がさげられればそれでよしとします。

〔注意したいこと〕

着脱ができるようになったらほめるようにしますが、できれば上着を着終わったら外へ出て遊ぶとか、ブランコにのせるなどといった子どもの喜ぶことをするのも一つの方法です。

◆着脱のできない子

着脱がうまくできるには、3歳レベルの発達が必要です。つまり、着脱には目と手の協応動作、なかでも運動機能面についてみても粗大運動や微細運動が組み合わさっているし、そのほか空間や位置関係、身体のイメージなどの多くの能力が要求されます。着脱ばかりに目をむけずに、運動を通して全体の発達を促すような遊びを取り入れるのもひとつでしょう。また部分的であっても、今できることからはじめていくようにします。

第4章 自閉症児についての現状とこれからの課題

自閉症のような障害により特別な機能訓練・療育などが必要な場合には、障害に応じた通園施設が各市町村に設けられています。通園施設と保育所（園）・幼稚園を併用する形のようにについては、各市町村に相談して決められる場合がほとんどです。自閉症児のように発達に遅れのある子どもたちの保育所（園）と幼稚園の現状をみてみたいと思います。

保育所の目的は、「日々保護者の委託を受けて、保育に欠けるこの乳児または幼児を保育することを目的とする施設」とあり、保護者が働いている、あるいは疾病などにより保育に欠けることを条件としています。しかし、「特に必要があるときは、日々保護者の委託を受けて、保育に欠けるその他の児童を保育することができる」ともしています。

所轄は厚生労働省になります。保育所における障害児の受け入れは、ノーマライゼーションの理念が広く社会に受け入れられつつあることから、定着してきています。最近の障害児保育の状況を表⑥でみると、年々、増加の傾向にあることがわかります。

障害児の保育をおしすすめるためには、国

表⑥ 障害児保育を実施している
保育園数と人数

年度	実施か所	人数
平成10年度	5,675	8,365
平成11年度	5,904	8,727
平成12年度	6,249	9,538
平成13年度	9,369	9,674
平成14年度	6,722	10,188

の特別保育事業としての「障害児保育対策事業」があり、障害児を受け入れている保育所に対し保育の加配や障害児保育を行うために必要となる設備整備に助成をし、実施の保育所の拡大を図る、と示しています。今後は、少子化の影響を受け、子どもの数が減少することが予測されていますが、自閉症児をはじめ障害児の入所（入園）数はしばらくは増加の傾向にあると思われます。

そして、保護者から受ける相談として、保育所（園）よりも幼稚園に入りたいということが多くあります。幼稚園が幼児教育の場であるという認識のためだと思います。これは、幼稚園の所轄が文部科学省であり、教育を受けるという響きがつよいからと考えられています。幼稚園の場合は、学校教育法第77条によると、「幼児を保育し、適当な環境を与えてその心身の発達を助長する」としています。保育時間も異なり、幼稚園は原則として一日4時間が標準で、このほか預かり保育もできます。幼稚園（公立・私立）における障害児の受け入れは、保育所（園）と同じく、増加の傾向にあります。

このように、障害をもつ子どもとそれを取り巻く地域社会がより密接な関係になってきていることが挙げられます。しかし、まだまだ親や教師、そして地域社会の人の自閉症についての知識が備わっていないのも現状です。より一人一人の障害に対する理解を深め、保育所・幼稚園、学校などをも含めた地域社会のケアにがなされることによって、障害のもった子どもたちが様々な、可能性を広げることができるとではないだろうか。

年々、障害児教育に関する関心は高まっています。現段階では、まだまだ実現することが難しい事柄でも、意識の高さ、関心の高さがあれば、自閉症をはじめとする障害をもった子どもたちが、安心して暮らせる社会がやってくることを私は信じています。

おわりに

「自閉症」ということばは以前から耳にしていたましたが、それは私の頭で「自閉症」ということばがひとり歩きしていただけ、とこの論文や教育実習を通してわかりました。「自閉症」は想像以上に重い障害でした。教育実習で出会った自閉症の子どものこと、そしてその子どもたちが社会的自立をしていくにはどういった保育や指導が行われるべきかを考え、今回のテーマにしました。少しながら現状を把握できたと思いますが、まだまだ自閉症の指導方法、支援サービス機関にはまだまだ問題が山積みになっています。その中で、私に一体何ができるか、私たちには何ができるのかということを、私は考えていました。その答えがこの論文を通じて、わずかながら見えてきた気がします。それは、まず現状を把握し、自閉症がどのような病気かということを知るということではないだろうか。一人一人が理解を深め、意識が高まることで、社会全体をも動かす力につながります。これからもいろいろなことに対して視野を広く持ちたいと感じました。